

私の幼児教育論Ⅸ

保育の基本(七)



神 沢 良 輔

三 保育の基本(七)

——幼児とのかかわり合いの中で——

(ix) 必要なときには十分な指示をす

(1)

幼児たちの行動は、常に生命力あふれる活気に満ちた活動によって支えられている。それは、幼児たちがいろいろな刺激に対して、いつも活動的に、探究的に、好奇心にみちた、また、たくみな創造によって、積極的に方向づけられているからである。

もし、幼児たちに、このような活動が見られないとすれば、そ

れは、一方では、その幼児自身やそれととりまくこれまでの生育歴を含めた環境の中に、なんらかの欠陥があるということになるであろうし、他方では、現在の園での生活や保育のあり方に問題があるということになるであろう。

いうまでもなく、“幼児が自ら選んで行う経験や活動”といわれているものや、いわゆる“自由遊び”といわれているものは、その基本に、このような幼児の自発性や積極性をおいているということができるし、また、そのような幼児のもっている心性を十分に発揮することにより、幼児は、幼児なりに自己表現や自己実現をすることができるし、それによって発達していくということになろう。

だから、このような幼児の特性が十分に発揮されなければ、幼

児の保育における基本は、その土台から崩れるということになる。わたくしたちが、保育の内容として幼児の生活である遊びをたいせつにしているということは、幼児の遊びが、幼児の積極性や自発性に支えられているということによるからであろう。

さて、このような幼児の活動が十分になされるためには、これまでみてきたような、“保育者と幼児とのかわり合い”がその基本となっていることについてはいうまでもないが、その中で、幼児のもっている“積極的な方向づけ”を、幼児の特性にに応じて組織化し構造化して、習慣、技能、興味、態度を育ててやることも必要である。

そのためには、“必要なときには十分な指示”をしてやることも、またたいせつである。

しかし、実際の具体的な保育場面では、このようなことは、うまくいかないことが案外に多いのである。

それは、幼児のもっている方向づけと、保育者のもっているその幼児に対する方向づけとが、必ずしも同じではないということがあったり、逆に、幼児が保育者に方向づけをしてもらいたいと思っているのに、保育者がそれに気づかなかったりすることも多

いのではないかと思われるのである。

また、必要なときには十分な指示をするといっても、幼児の活動している場面や状態、その活動の内容などによって、それに適した対応の仕方はいろいろあるだろうし、これが最適と断言することはもちろんできない。さらに、角度をかえてみると、このことは、結局は幼児の指導における基本問題であるということにもなる。

そこで、これらについての、二、三の具体例を以下に見ていくことにしよう。

(2)

入園当時の幼児にとっては、園の生活リズムを理解することはとつてもたいへんなことである。そのために、ひとりひとりの幼児は、できるだけ保育者の近くにいて、ひとつひとつの行動について保育者の指示や承認を求める。

もちろん、園での生活リズムは、くり返しのリズムであり、そのくり返しのために、幼児たちはリズムの予測ができ、やがて安定感をもつようになる。つまり、今日こんなことをしたら、明日もこんなことをしなければいけないのだなというようなことであろう。このような生活のリズムは、基本的な生活習慣を

形成していくのにも必要であろう。

私の前に勤務した幼稚園の中に、四日市の公害地にある幼稚園がある。そこでは、毎日数回にわたって“うがい”をすることに なっていた。入園当初は、この“うがい”のしかたをひとりひとりの幼児に指導するため、学級全体でする活動をする前に、手洗いといっしょにすることにしていた。

もちろん慣れてくると、朝登園したらすぐ“うがい”をするのであるが、入園当初では、とくにひとりひとり幼児との朝の出会いがたいせつであり、そのために保育者が“うがい”の場所へいって、幼児のしているようすをみてあげることが困難なためである。

“うがい”は“うがい容器”の関係で、各学級一列に並んでする。保育者は、幼児のコップに“うがい液”を必要量だけ入れてあげる。(これは慣れてくると幼児が自分でする。)そして、幼児はこれを手洗い場にある水道の水でうすめて“うがい”をするということになる。そして“うがい”の早く終わった幼児から、保育室でみんなのそろうのを待つということになる。

このようにして“うがい”をするのであるが、“うがい”の終わったあとで、保育室に帰ってから幼児たちが落ちつかなくてさわぎまわっている学級と、きちんと坐って待っている学級とはっき

り二つの型ができてしまった。

このことが職員室の話題になった。ある保育者が、“私の組、元気のよい子ばかりもらったんやろか、“うがい”のあとあばれてあかへんもん”というと、他の保育者は、“私のくみ、おとなしいよ”といいだした。そこで、どうしてこんなになったかいろいろと具体的な保育者の行動について話し合った。

その結果、幼児が落ちついて待っている学級の保育者は、“うがい”が終って保育室に入るひとりひとりの幼児に、“みんなが集まってくるまで、お部屋で坐って待っててね”と話しかけていたということである。しかも、その保育者は、ひとりひとりの幼児に話しかけるため、保育室の二つある入口のうち、一方は使用せず、必ず幼児たちが入る入口をきめ、そこを通過して保育室に入るようにしたということである。

このようなことが話し合われた結果、これまでうまくいかなかった学級もうまくいくようになったことはいうまでもない。

保育者のちょっとした指示が、幼児の行動や安定感に大きな影響を与えていることについて、いまさらながら深く感じ入った次第である。

(3)

このようなことは、学級全体でする活動の場合には特に顕著なことである。というのは、学級全体の活動は、必然的に保育者が前面にでる指導であり、幼児に活動の選択のできない場合が多いということである。だから、保育者の指示の的確さや、その指示をする時機とタイミングということがたいせつになる。

そこで、ある保育者の実践とその反省についての一部を紹介しよう。

その保育者は、この日の学級全体の活動に身体的なリズム反応を用意していたので、まず、七・八人くらいであるく、とぶ、かけることからはじめた。幼児たちは、ピアノの音にあわせて、中央にでて円をつくり動きはじめた。保育者は、興味を促すように強弱のアクセントをつけたり、方向転換させたりして、いろいろな方法を試みた。できる幼児たちはとても楽しんでいたし、保育者は幾分得意であった。

しかし、一方待機している幼児たちは、はじめは友だちの動きに対して静かに注意をむけていたが、そう長くはつづかず、からだが少しずつ動きだした。保育者は、それが気になってきたので、「坐っている方は、てをたたいてあげましょう」とみている幼児たちも活動するように指示した。そして、つきつきと交替して身体的なリズム反応をしたが、待機して見ている幼児たちにと

っては、手をたたくだけでは満足できなくなり、しだいに手拍子をとることをしなくなるとともに、自分の場を離れる幼児もでてきたりしはじめた。

保育者は、不安を感じて「お友だちが一生懸命あるいているから坐ってみてみましょうね。じゃ、こんどはうたをうたいましょう。」と活動を変えようとしたが、もう時すでにおそく、保育者の提案に従わない幼児もでてきた。そのため、しばしの間リズムの方は中断せざるを得なくなったということである。

このようなことは、リズム反応だけに限らず起りうることなのである。

保育者が心配になったり、不安を感じたりして、ただことばだけで二つも三つも指示を与えたり、与える時機を失うとかえって幼児たちが方向性をなくしたりすることが多いのである。このような場合は、幼児たちが別の行動をおこす前に、機先を制して興味あることを指示することがたいせつであるとともに、そのような指示のできるような余裕や見通しをもって、保育することのできる保育者になるよう努力することもたいせつであろう。

(暁学園短期大学)